

新版発行にあたって

ベプリジルは興味深い抗不整脈薬である。ベプリジルを数週間投与することで、電氣的除細動の不可能な持続性心房細動が洞調率化される例を経験すると、その思いはますます深くなる。

本書初版が循環器薬物治療実践シリーズの1冊として上梓されたのは、2007年3月のことである。その頃すでに、持続性心房細動に対する効能追加を期待する声があるが、唯一ベプリジルを抗不整脈薬として使用している我が国の臨床現場からあがっていた。その声に後押しされるように医師主導型治験(J-BAF)が行われた結果、持続性心房細動に対する除細動効果が明らかになり、2008年に効能(7日以上持続する持続性心房細動)が追加された。2009年10月刊行の本書改訂版は、2007年以降に得られた知見を加筆したものであった。

ベプリジルは当初狭心症を適応としてフランス、米国、ベルギーの3国で発売されたが、催不整脈作用のため、米国では2006年以降使用できなくなった。欧州での使用状況については不明な点が多いが、副作用情報がフランスからは引き続き報告されており、現在も使用されていることがうかがわれる。一方我が国では、基礎、臨床の領域から新しい知見が、現在に至るまで引き続き報告されている。さらに、ベプリジルの血中濃度測定が2012年に保険採用になったため、新たな情報を提供する必要があることが認識されるに至った。

ベプリジルの使用できる地域がますます限定されてきているなかで、抗不整脈薬として唯一使用可能な我が国で得られた新しい情報を加味して、ここに新版を上梓することになった。新しく取り上げた内容は、血中濃度に関する知見(chapter 4)やベプリジルとカテーテルアブレーションによるハイブリッド治療(chapter 9)、その他(chapter 6の後段、個々の章における適宜の加筆訂正など)である。ベプリジルに関する最新の情報が盛り込まれたこの新版を参考に、「ベプリジルを上手に使うコツ」を学んでいただければ幸いである。

平成25年3月 日本心電学会学術諮問委員会

井上 博

小野克重

中谷晴昭

平岡昌和